

Will と *be going to* に関する一考察

南 満幸

0 はじめに

本小論を書くきっかけは、筆者の研究室を訪ねて来たある本学OBの一言であった。ひとしきり世間話をした後、某中学校で英語教師をしている彼が、英語の教え方についてアドバイスを求めてきたのである。特に、*will* と *be going to* を生徒たちにどう教えたらよいか相当悩んでいる様子だった。

筆者自身も、20数年間英語をやってきた今でこそ「自明の事」のつもりでいるが、実は中学生時代はこの *will* と *be going to* に相当悩まされた。当時の英語教諭に「*will* が未来で、*be going to* が近接未来だ」というような説明をされても、今一つ腑に落ちなかったことを覚えている。幸い、その後多くの英文を読んだり、外国人と英語で話したりするうちに（言わば「帰納的に」）自然に両表現を身につけてきたつもりだったが「違いを言葉で中学生にも分かるように説明する」のは確かに決して容易な事ではない。

1 過去の研究の蓄積

自分なりの解答を見つけるための第一歩として、言語学者たちがこれまで *will* と *be going to* をどのように説明してきたのか振り返ってみることにしよう。

1-1 Quirk et al (1972)

SHALL + infinitive (in 1st person only; chiefly BrE)

WILL or 'LL + infinitive in all persons, including 1st person.

I shall/will try to do my best.

He *will be* here in half an hour.

I *'ll do* it for you.

The future and modal functions of these auxiliaries can hardly be separated. Although *shall* and, particularly, *will*, are the closest approximation to a colourless, neutral future, they do not form a future tense comparable to the present and past tenses. . . .

Be going to + infinitive

This construction denotes future and intention. Its general meaning is 'future fulfilment of the present.' Looked at more carefully, *be going to* has two more specific meanings, of which one, 'future of present intention,' is used chiefly with personal subjects:

When are you *going to get* married?

The other meaning is 'future of present cause,' which is found with both personal and non-personal subjects:

She's *going to have* a baby.

It's *going to rain*.

Both these suggest that the event is already 'on the way.' *Be going to* is not generally used in the main clause of conditional sentences, *will/'ll* or *shall* being preferred instead:

If you leave now, you *'ll never regret* it.

*If you leave now, you *are never going to regret* it.

(イタリック体は原著者、下線は著者。 以下同じ。)

伝統的な説明の一つの典型と言えるものだが、かなり明快である。特に *be going to* の意味は「①現在の意図の先行き、②現在の原因の先行き」の2つに分類されるが、「問題の出来事は既に進行中である」ことを暗示している点は共通している、というくだりは分かりやすい。

1 – 2 Leech & Svartvik (1994)

Will (often reduced to 'll), or sometimes shall (rather formal) (with a first person subject) can express the neutral future of prediction:

Temperatures tomorrow *will be* much the same as today.

We *shall hear* the results of the election within a week.

It is particularly common in the main clause of a conditional sentence:

If the book has real merit, it *will sell*.

Wherever you go, you *will find* the local people friendly.

In that case, I guess I'*ll have* to change my plan.

But with personal subjects, will/shall can also suggest an element of intention:

I'*ll see* you again on Tuesday.

They'*ll make* a cup of coffee if you ask them.

Be going to + INFINITIVE tends to indicate the future as a fulfilment of the present. It may refer to a future resulting from a present intention:

Are you *going to put* a coat on?

She said that she'*s going to visit* Vic at two o'clock.

She says she'*s going to be* a doctor when she grows up.

It may also refer to the future resulting from other causative factors in the present:

I think I'*m going to faint* (i.e. I already feel ill).

It'*s going to rain* (i.e. I can already see black clouds gathering).

I'*m afraid we're going to have* to stop the meeting now.

In sentences like these last three, *be going to* also carries the expectation that the event will happen soon.

そもそも will と be going to が日本人にとって厄介なのは、選択を誤ったら非文法的な (ungrammatical) 文というよりもむしろ、英語として不自然な (unnatural) または奇妙な (odd) 文が出来てしまう、という事に起因していると思われる。つまり、「文法的に正しい vs. 誤っている」というような「はっきり白黒をつけられる」類の問題ではないことが多いのである。英語を母国語としている人なら、「どちらが英語としてより自然または適切であるか」を見極める能力を自然に身につけられるのであろうが、日本人はそういうわけにはいかない。

その点、この *A Communicative Grammar of English* は、さすがに「英語を外国語として学習する人」を読者に想定して書かれた文法書（著者たち自身が「序文」でそう明言している）だけあって、「自然な英語」の感覚を帰納的に身につけられる環境にない人々への配慮が行き届いている。

具体的には、最後の3つの例文のカッコ内の説明があることによって、Quirk *et al* に見られた「問題の出来事は既に進行中である」という記述がどういう意味であるかよく分かるようになってきている。（因みに、Leech, Svartvik 両博士は Quirk *et al* の共著者でもあった。）

2-3 Reichenbach (1947)

Reichenbach は、「時制」を分析する一つの方法として、命題の時間的位置を次の3つの構成要素によって決定するシステムを考案した。

- (1) S: the moment of speech
- E: the time of event
- R: the reference point

このシステムの下では、英語の単純過去と現在完了は次のように明確に区別することができる、としている。

- | | | |
|--------------|----------------|----------|
| (2) (a) 単純過去 | John left. | E, R — S |
| (b) 現在完了 | John has left. | E — R, S |

では、助動詞 will/shall を含んだ未来の文だとどうなるか。彼は「次の2通りの解釈が可能である」と述べている。

- (3) (a) S, R — E
 S — R, E

つまり、「R は現在にも未来にも位置し得る」と考えたのだが、その根拠は、「will/shallは現在の副詞とも、未来の副詞とも共起し得る」という事実であった。例えば、

- (4) (a) *Now I shall go.*
 (b) *I shall go tomorrow.*

ここまではいいとしても、(4) (c) のような「現在の副詞と未来の副詞が同時に存在する文」も可能であるという事実を突きつけられると 彼のシステムは途端に stalemate に陥ってしまう。

- (4) (c) *Now we'll have no money at the end of the month.*

更に困ったことには、(4) (a) – (c) に見られる時の副詞は、be going to と同様に共起し得るのである。即ち、

- (5) (a) *Now I'm going to go.*
 (b) *I'm going to go tomorrow.*
 (c) *Now we're going to have no money at the end of the month.*

従って、時の副詞との共起関係を「時制分析の重要な要因」と見なし続ける限り、be going toを含んだ文の表示も (3) と同じにならざるを得ない。少なくとも、「will と be going to の違いを出来るだけ明確な形で捉えたい」という本論の目標達成には役立たない、ということになる。Reichenbach のこのシステムについては、後でまた触れることにする。

2 どのレベルでの違いか？

Will と be going to の間に何らかの違いがあることに疑問の余地はないであろう。「全く同じだ」という主張は少なくとも我々の言語的直観に反するし、そもそも「常に交換可能な (always interchangeable) 2つの表現」を英語がいつまでも持ち続けているとは到底考えられない。

それでは、どのレベルでその違いが出てくるのか調べることにする。

2-1 文脈の有無

まず、次の例を考えてみよう。

- (6) (a) I *will* take up bird watching.
 (b) I'm *going to* take up bird watching.

どちらの文も文法的には全く問題がない。つまり、文法はこの2つの文に「優劣をつける」ことはできない、ということになる。では、この2つの文が、「押入から古い双眼鏡を引っ張り出して来たかと思ったら、今度はそれを鼻歌混じりに磨いている夫に対して妻が "What are you doing?" と聞いた時の返答」だと状況設定してやるとどうなるであろうか。今度ははっきり「優劣をつける」ことができる。(a) が「誤りである」とまでは言わないが、少なくとも(b)の方が英語としてより適切 (more appropriate) またはより自然 (more natural) であることは確かである。

どうやら、文脈 (context) を与えることが *will* と *be going to* の違いを明らかにするのに役立ちそうである。となると、*will* と *be going to* の違いは、意味論などの文法のレベルというよりはむしろ、語用論 (pragmatics) のレベルで論じられるべき性格の問題かも知れない。

2-2 話し手の視点

次に、「話し手の視点」という見地から考えてみよう。Wekker (1976) は、イギリスの BBCテレビの天気予報を例に取って次のような非常に興味深い観察をしている。

- (7) Finally, tonight, on to the weather forecast for the South. The night is going to be rather cloudy, but most places will remain dry. The temperature will fall around 40 near the coast,...and the winds, they'll be south-east ...

There is obviously very little difference in meaning between *be going to* and *will* in this spoken weather forecast. But the interesting point here is that this forecast, like several others,... begins with *be going to*, and then con-

tinues with *will*. This, I claim, is not merely a matter of style ... but also something which has to do with the implications inherent in *be going to* and the *will/shall* construction. The explanation for this use of *be going to* is that the television weatherman begins his forecast, as normally in conversation, from present indications or circumstances (such as the black clouds gathering, or after reading the newspaper forecast), and then switches his attention to the future, using *will*. A similar shift of perspective occurs elsewhere in the grammar: it often happens that a story or a song begins with the present perfect and then switches to the past tense. (1976: 125)

天気予報に登場してくる *be going to* と *will* (下線部) には「意味的な違いはほとんどない」のであって、*be going to* から *will* への移行は、単に文体に変化を持たせるにとどまらず、「話し手(ここでは天気予報係)の視点の現在から未来への移行」をも反映している、というのである。

2-3 Will は「省略的」?

Binnick (1972) の指摘も興味深い。(8) (b) がそれ自体で完結した (complete) 文であるのに対して、(8) (a) は「何かが省略されている」(elliptical) という印象を与える、というのである。

- (8) (a) The rock *will* fall.
- (b) The rock *is going to* fall.

何故そのような違いが生じるのか。次のペアと比べてみよう。

- (9) (a) Don't sit on that rock. It'll fall.
- (b) Don't sit on that rock. It's *going to* fall. (Palmer, 1974: 164)

いずれの文も英語としてきわめて自然である。但し、「危ないからその岩に座るな」と警告しているのは一緒でも、ニュアンスは若干異なる。(a) の文が恐らく「(今はかろうじてバランスが保たれているが、) 君が座れば君の体重によってその岩は落ちる (= If you sit on that rock, it'll fall.)」という意味に解されるのに対して、(b) の文は(例えば)「夜来の大雨によってこの辺りの地盤は非常に脆くなっているから、君が座ろうと座るまいと、その岩は落ちる」という意味に解釈されるであろう。

ここで (8) のペアーを振り返ってみると、(b) は「岩が落ちる」という出来事が実現する可能性を感じさせる予兆なり状況なりが現時点で存在する」ということを言わんとしているから全く違和感がない。この際、その「予兆・状況」に聞き手が気づいているかいないかはどうも無関係のようである。(この場合は、聞き手が気づいていないようなので、話し手はそれに聞き手の注意を向けさせようとしてこの発言をしたものと考えられるが) それに対して、(a) は、(9) (a) におけるように、何らかの文脈を与えられない限り、極端な言い方をすれば、「20XX年人類は滅亡するであろう」式の「予言」のように感じられ、いかにも「唐突な」印象を与え、それが Binnick の “A sentence containing *will* is often felt to be elliptical in the sense that it is incomplete as it stands.” というコメントに繋がったのであろう。

2-4 「確定した」未来

次に、きわめて特殊な状況における「未来」を考えてみよう。数年前に大ヒットしたアメリカ映画「バック・トゥ・ザ・フューチャー 2」における、「確定した未来」について云々する、というSFならではのワン・シーンである。自動車型のタイムマシン・デロリアン号に乗って未来を見て来た Doc に Marty が質問している。

(10) Marty: What happens to us in the future? Do we become assholes or something?

Doc: No, no, you and Jennifer both turn out fine.

この辺りでは、動詞は全て現在形で会話が進められているが、筆者にこの特異な例に気づかせてくれた樋口 (1991) はこのことを次のように説明している。

…ここで使われている現在形の代わりに *will* や *be going to* は使えないであろう。それは推測でもなく、現在進行中の事態とも切り離された未来であって、時間的には未来であっても、見てきた「事実」に関する言及だからである。

通常未来の出来事というのは未実現であり、未だ現実とはなっていない事だから、その表現方法としては、推測的に言う場合や、実現に向かって心の準備なり準備段階の動作なりが現実中存在する場合、予定という形で現実と見なされる場合などがあるわけだが、それらは、いずれも時制としては、現在時制に属するものと言えるだろう。…… (樋口 1991: 58)

上の例ほど特殊でなくても、「確定した未来」について語ることは、日常生活でも起こり得る。時間的には未来の出来事でも、それが起きることが「確定している」場合は、

英語では現在形で表わすことはよく知られている。

- (11) (a) *Tomorrow is my birthday.*
 (b) **Tomorrow will be my birthday.*
 (c) **Tomorrow is going to be my birthday.*

(9)－(10)の例を踏まえると、(11) (b), (c)の文が容認されないのは「明日」が「話し手の誕生日」であるということは「確定した未来」であるから、willによって「そうなるだろうと予言する」ことも、be going to によって「そうなる可能性がある」と私（＝話し手）に予想させるような予兆・状況があると示す」ことも無意味（少なくとも不自然）だからである、と説明することができよう。

そろそろ will と be going toの「正体」が大分見えてきたような気がするが、もう少し他の表現との関連を調べてみることにする。

2-5 If 節との関係

If の条件節を含んだ文は、条件節・帰結節を問わず、will と be going toの違いを際立たせるために、多くの言語学者たちが（言わば「リトマス試験紙」として）好んで用いてきた。まずは、帰結節に現われたケースを見てみよう。

- (12) (a) *If you don't pass the retest, you'll be flunked out.*
 (b) **If you don't pass the retest, you're going to be flunked out.*

紙幅の関係で多くの例はここでは紹介できないが、帰結節では圧倒的に will の出現率が高い。但し、「話し手の意図・決意」を表わす場合は、be going to も可である、というよりも be going to の方が好まれるようである。では、この preference はどこから来るのであろう。

- (13) (a) *If Jack is chosen captain, I'll quit the team.*
 (b) *If Jack is chosen captain, I'm going to quit the team.*

この (13) では、両文とも acceptable ではあるが、(b)が「Jack がキャプテンに選ばれたら、オレが辞めるからな！」と強い決意を表わしているのに対して、(a)は「… 僕がチームを去ることになるだろう」と淡々と未来の出来事を述べる、ややインパクトの弱

い表現のように感じられるようである。^{*2}

次に、条件節に現われた場合であるが、willには「原則として意志を表わす時しか条件節に現われることはできない」という制限があるため、^{*3}ここでもその枠内で考えることにする。

(14) If you { 'll
 {? 're going to } teach me karate, I'll teach you typing.

(15) If you { 'll
 {* are going to } eat your spinach, I'll give you some candy.

(14), (15) における、will と be going to の容認性 (acceptability) の違いはどこから出てくるのであろうか。この例に関しては、尾野 (1991) の説明が明快である。

… (14) (15) の文は、それぞれ、「空手を教えてくれるなら、タイプを教えます」「ほうれん草を食べるなら、キャンディをあげます」という「君がAする意志があり、そして実際にAしてくれたら、Bしてあげるよ」の約束の文である。このタイプの文では、Aの実行がBすることの条件である。ところがこのような文で、be going to を使用すると、Aを実行するか否かでなく、現時点における相手のAすることの意志の存在だけを問題にすることになってしまう。それ故、例えば、(14)においては、相手が実際空手を教えてくれなくても、その意志があるだけで、話し手はタイプを教えることを約束することになってしまい、この意味は明らかに約束の文としては不自然である。… (尾野 1991: 26)

つまり、willが（「Aする意志がある」ことは言うまでもなく）「実際にAする」ことまでも相手に commit させようとするのに対して、be going to は専ら、相手に「現在Aする意志がある」かどうか焦点を当てるから、このような「約束文」の条件節に用いるのは不適切である、という分析である。筆者の言語的直観に照らしてみても、これは妥当な見解だと思われる。

3 結び

Reichenbach (前出) は フランス語の近接未来と単純未来を次のように分析している。

- (16) (a) 近接未来: *Je vais voir Jean.* S, R — E
 (b) 単純未来: *Je verrai Jean.* S — R, E

これをそのまま、英語の *be going to* と *will* の分析に当てはめることはできないであろうか。 即ち、

- (17) (a) *be going to*: *I'm going to see John.* S, R — E
 (b) *will*: *I'll see John.* S — R, E

という分析をしてはどうかということである。^{*4} (同趣旨の提案は Haegeman (1989) にも見られる。) Reichenbach の言う R (= the reference point) を、天気予報の例を考察したときに取り上げた「話し手の視点」と言い換えると、

- (18) 共に、未来にある出来事が発生する様子を心に思い描く点是一緒でも、
- (a) *be going to* を使うことによって、話し手は「私の注意の焦点は発話時 (即ち、現在) にある」と「宣言」し、
- (b) *will* を選んだ時は、話し手は「私の注意の焦点は問題の出来事の発生時点 (即ち、未来) にある」と「宣言」する

また (18) で大切なのは、「私の視点は現在 (または未来) にある」と話し手が宣言した以上、聞き手は (そうできない特別な事情がない限り) その視点の位置を受け入れて、「同じ視点」で言葉を返すことを要求されるであろう、ということである。^{*5}

このように考えると、文脈を与えられた (6) (a) が (6) (b) に比べて「不自然」に感じられた (便宜のために、下に繰り返す) のも、「視点のズレのせいだ」という説明が可能になるだろう。

(6) Wife: What are you doing?

Husband: Well, (a) ?I *will* take up bird watching.

Well, (b) I'm *going to* take up bird watching.

(いや、バード・ウォッチングを始めようと思ってね。)

つまり、妻が（現在進行形を用いていることから分かるように）明らかに視点を現在に設定しているにもかかわらず、(a) では夫が will を用いることによって視点を未来に設定しているから、(b) と比較すると、どこかとんちんかんな、違和感のある返答に感じられるのだ、ということである。

一方、(b) と答える時、夫は、自分がバード・ウォッチングしている姿を心に思い描いてもいるかも知れないが、それよりもむしろ、「ただ観察するだけじゃつまらないか。写真という形で記録に残すために今度のボーナスで望遠レンズも買おうかな。待てよ、鳥類図鑑も要るな ……」というふうに、出来事の実現に至るまでのプロセスが現在進行中であるということの方に意識が向いている、と言えよう。

また、次の例文において、

- (19) (a) I didn't know that you $\left\{ \begin{array}{l} \text{are going to} \\ \text{?will} \end{array} \right\}$ travel by boat.
 (b) Did you know that Ann $\left\{ \begin{array}{l} \text{is going to} \\ \text{?will} \end{array} \right\}$ get married?

will を含んだ文が「不自然」なのは、同一センテンスの中で「2つの異なる視点」が提示されているからだ、と考えられる。つまり、I didn't know (または Did you know) によって「私の視点は現在にある」と指定しておきながら、続く that 節では「視点は未来にある」としているから、聞き手の側に「どちらの視点に合わせればいいんだ？」という戸惑いを感じさせるのである。

最後に、安井 (1995) の説明を紹介した後、これまでの考察の成果をチャートにまとめて本小論を終えることにする。

(未来を表わす際に) will を用いる用法と、現在時制 (筆者注: be going to を含む) を用いる用法との一番大きな違いは、will を用いる用法は、未来に起こるとされている出来事が、発話時においてまだ未確定であってよいのに対して、現在時制を用いる用法では、未来に起こるとされている出来事の少なくともその兆候が発話時において確認できていなくてはならないということである。例えば、(20)においては、will を用いた表現は、予言者の言い方であると感じられるのに対して、(21)は、すでにおなかの大きいとか、妊娠していることを話し手が知っているなど、予測されている出来事について

てその兆候の確認が発話時においてなされている必要がある。

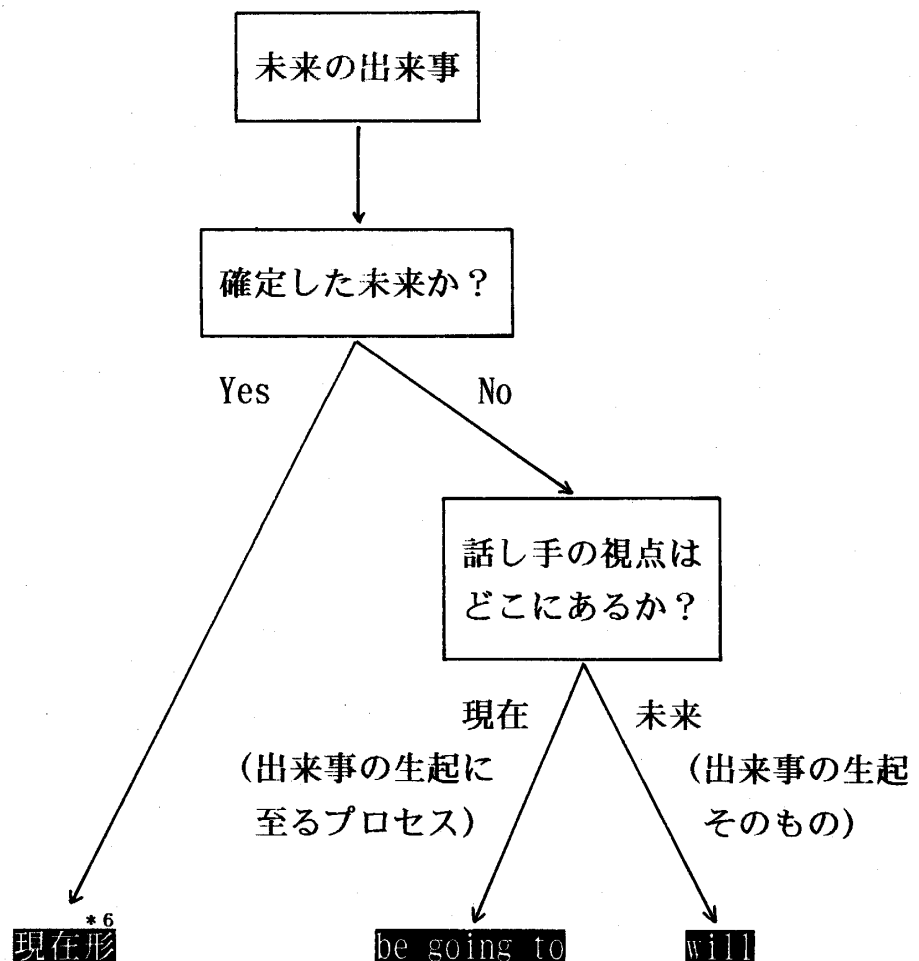
(20) Mary will have a baby (when she is twenty-five).

(21) Mary is going to have a baby.

Freed (1979)にしたがって出来事 (event) は、出だし (onset)、核 (nucleus)、結び (coda) から成り立っていると考えることにしよう。

そうすると、willを用いる未来を表わす用法は、まだ出だしもまったく具現化されていない出来事の生起を予測する表現といえる。これに対して、現在時制を用いる未来を表わす表現は、出来事が少なくとも出だしまで進んでいなくては用いることができないものとなる。……

(安井 1995: 67-68)



Notes

* 1 例文 (4)－(5) における now は「純粋な時の副詞ではない」という主張も成り立つかも知れない。At the end of the month との関係で、ほとんど文頭にしか「行き場所」のない (4)(c), (5)(c) ではやむを得ないとしても、「純粋な時の副詞 now」の最も典型的な位置である「動詞の後ろ」に來ていないからである。但し、now が修飾しているのは、発話時点 (S) において話し手の頭にある推測、またはその時点で進行中の状況（これらは無論「問題の出来事の実現時点 E」とは別）である、という主張もまた可能であると思う。

* 2 この辺りの微妙なニュアンスの違いを判断するに当たっては同僚である J. Kevin McDougald 助教授の協力を仰いだ。この場を借りて、貴重な助言をくれた彼に感謝の意を表したい。彼の native speaker としての感覚では、(a) は「Jack がキャプテンに選ばれること」が「私の退団」に直結すると述べているのに対して、(b) は「既に退団の意志が固まっている」ことを強調するより emotional な発言のように感じられる、ということであった。

* 3 「原則として」という表現からも分かるように、例外も少なからずある。これについては、Close (1980), Declerk (1984), また新谷 (1991) などを参照されたい。

* 4 本稿の前の部分で「破綻」の原因になった now との共起関係は無視してもいいのではないか、との判断に基づく。例えば、次のペアーを比べた場合、

- (a) What time is it now?
- (b) What time is it?

相手に (b) と聞かれた時に「now がないから」といって、現在の時刻以外を答える人が果たしているであろうか。視点を現在に設定するには、現在形の動詞 is を使うだけで事足りるのであって、(a) における now は、ただそのことを「強調しているに過ぎない」のである。* 1 も考え合わせれば、「now の有無は、Reichenbach 流の分析には何ら影響を及ぼさない」と考えるのも、あながち理不尽ではあるまい。

* 5 人と人との会話を出来るだけスムーズに、また能率的に進めるために、人々が守らなければならない（無意識のうちに守っている）約束事・ルールについては、Sperber & Wilson (1986)、また Grice (1975) などを参照されたい。

* 6 もちろん、決して「確定した未来」ではない出来事なのに、現在形で表わすこともある。

If Jack comes, please tell him I'm in the laboratory.
Take an umbrella with you in case it rains.

これらについては、また別の機会に論じたい。

Bibliography

- Binnick, R. I. (1972) "Will and be going to." In *CLS* 7.
- Close, R. A. (1980) "Will in if-clauses." In S. Greenbaum, G. Leech, J. Svartvik (eds.) *Studies in English Linguistics for Randolph Quirk*. London: Longman.
- Declerck, R. (1984) "Pure future will in if-clauses." *Lingua* 63.
- Freed, A. F. (1979) *The Semantics of English Aspectual Complementation*. Dordrecht: Reidel.
- Grice, H. P. (1975) "Logic and Conversation." In Peter Cole and Jerry L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*. New York: Academic Press.
- Haegeman, L. (1989) "Be going to and will: a pragmatic account." In *Journal of Linguistics* (vol. 25-2). Cambridge University Press.
- 樋口万里子 (1992) 「will and be going to: present thought and present reality」九州工業大学情報工学部紀要 (人文・社会科学編 4)
- Leech, G. & Svartvik, J. (1994) *A Communicative Grammar of English*. (2nd ed.) Harlow: Longman.
- Quirk, R. et al (1972) *A Grammar of Contemporary English*. London: Longman.
- 尾野 治彦 (1991) 「進行形についての覚え書き —— be going to と will の比較に関連して —— 」 函館英文学 XXIX
- Reichenbach, H. (1947) *Elements of symbolic logic*. New York: The Free Press.
- 新谷 多枝 (1991) 「If 節中の will」 静岡英和女学院短期大学紀要 23
- Sperber, D. & Wilson, D. (1986) *Relevance*. Oxford: Blackwells.
- Wekker, H. C. (1976) *The expressions of future time in contemporary British English*. Amsterdam: North Holland.
- 安井 泉 (1995) 「英文解釈を支える語用論」 言語研究と言語教育 — 相互活性化に向けて — 筑波大学 (95. 3)